

令和元年11月1日（金）

「復興と再生に取り組む高等学校との交流会」に行ってきました！」

11月1日（金）、盛岡第四高等学校にて、「復興と再生に取り組む高等学校との交流会」が開かれました。この交流会は、毎年盛岡四高が被災地の学校（高田高等学校、大槌高等学校）を招き、「復興」をテーマにお互いの取り組みについて発表しあうものです。今年度は、大槌高等学校代表として土沢葵さん、佐々木結菜さん、三浦七夢さんの3名が参加しました。

はじめに高田高校の発表者や盛岡四高の生徒会と交流をしました。復興関係の話題から好きな歌手まで、話題は尽きることなく、時間が足りないほどでした。



そしていよいよ盛岡四高での発表へ。1、2学年の生徒約500名の生徒の拍手で出迎えてもらいました。

大槌高校の前校長で、現在は盛岡四高の五日市健校長先生から、「被災地の現状を知ること、そして『復興』を同じ高校生が考えているということを知ってほしい」とご挨拶がありました。

プレゼンテーションは、宮古市田老や山田町に実際足を運んだ盛岡四高2年生を代表し、生徒会執行部の報告からスタートしました。実際に防潮堤を見学し「海が見える場所が少ない」と内陸の高校生ならではの視点で紹介をしていました。最後には100年後の人々にどのように伝承していくかということに焦点を当て、「教育を通して多くの人に、確かな情報を伝えることが大事である」と締めくくりました。



次に、高田高等学校の発表です。高田高等学校では「まちおこし」のために実際にどのような計画、アクションを起こしていくといいのかを高校生の視点で考える、という「ビジネスプラン」の発表でした。高田高校では、2学年全員がこの「ビジネスプラン」を考え、校内で発表するという取り組みを「総合的な学習の時間」で行っています。アニメやマンガの舞台となった場所をファンが巡る「聖地巡礼」に着想を得た発表や、海上アトラクションを設営する発表など、どれも高校生ならではの「ビジネスプラン」でした。今回の発表者3名は校内選考のトップ3ということもあり、どの発表も陸前高田の現状をよく分析し、そのうえで具体的なアクションプランを考え、発表していました。



ラストを飾るのは大槌高校の発表。震災後、大槌高校が避難所となった話、復興研究会が発足し現在まで20回定点観測をおこなった話など、大槌高校と「復興」の現在までのあゆみを、土沢葵さんが紹介しました。



その後、今年度完成した、「復興紙芝居」の発表をさせていただきました。この「復興紙芝居」は、大槌高校生の体験談をもとに作成したものです。

今回は完成した3本のうち、佐々木結菜さんが中心となって構成を考えた作品を発表しました。震災当時大槌小学校の2年生だった「あっちゃん」という女の子を主人公とし、彼女の視点での避難の様子を中心に描いた作品です。佐々木さんのゆったりとした、それでいて芯のあるしっかりとした語りの口調に、会場の全員が聞き入っていました。



今回の交流会に参加した生徒の感想を一部抜粋します。

- ・「盛岡でも、復興・防災についての活動をしていることにおどろきました。また、大きめのプロジェクトを立てるのがすごいなと思いました。内陸と沿岸の震災時の違いを知ることができました。」（土沢葵さん）
- ・「（盛岡四高の生徒は）100年後までメッセージをどう残すのかと考えていました。伝える努力をすることが大事だと教えていただいたので、私たちも教訓など伝える努力をしていきたいと思いました。高田高校生は、海上アスレチックを作ろうとしたり、アニメ・マンガで町興しをしようとするなど、とても大きな事をしようとしていたので、私たちも大きな事に挑戦し、町興しのために何かしたいと思いました。」（佐々木結菜さん）
- ・「今回、交流会に参加してみて、大槌高校のほかにも沿岸の復興に対して向き合っている高校があり、親近感がわきました。一番印象に残った事は、私たちの感じる沿岸と、盛岡四高（をはじめとする）内陸の学校や、（同じ沿岸であっても）高田高校から見る感じ方がそれぞれ違っていったことです。」（三浦七夢さん）

盛岡四高の生徒会の発表から、内陸の高校生だからこそ気づく視点があるのだということ、高田高校の生徒の発表から、「復興」のあり方のアイデアをそれぞれ感じました。

これからの活動に生かしていきたいです。